

Title	趙樹理の文学(上) : その人と作品
Author(s)	中川, 俊
Citation	大阪外国語大学学報. 36 p.29-p.45
Issue Date	1976-03-01
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80581
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

趙樹理の文学(上)

——その人と作品——

中 川 俊

Literature of Zhao Shuli

——on his life and works——

Toshi NAKAGAWA

赵树理的文学

——他的生涯和作品——

在这篇论文，我想写出一点我研究赵树理的一些小心得。这篇论文分成「上」・「下」两个部分。在「上」的部分，我想主要編一部赵树理的年谱，做我自己研究赵树理传记的一个基础，同时供大家——想研究赵树理的人们——做一个参考。在「下」的部分，我就通过分析赵树理的一些主要作品，想看一看他的作品具有什么样的主题，结构，人物，描写，背景等等。

现在这篇论文的「上」的部分，我写的内容主要是以下几种問題。

- I 1. 赵树理是一个什么样的作家
- 2. 赵树理和「八音会」
- 3. 从师范学校走到流浪的生活
- 4. 太行山里
- 5. 中华人民共和国成立以后
 - a) 「金锁」問題和赵树理的自己检讨
 - b) 赵树理和农村「知识分子」の問題
 - c) 赵树理批判

II 赵树理的年谱

要是是不够或者错误的地方，請各位提出意見賜教斧正。

は じ め に

ことにふれて趙樹理の作品を読みだしてから、もう何年になることだろうか。趙樹理が中国の新しい作家として、解放区に現れてから、中華人民共和国の成立、その後の社会主義リアリズムの時期、革命的リアリズムと革命的ロマンチズムの結合が主張された時期、そして、おそらく

予兆としての「中間人物論批判」と文化大革命の時期、この間にも趙樹理文学に対する中国での評価は、プラスからマイナスへ大きく変わったように思われる。しかし、単に外側の動きだけで、文学や作品を評価づけていくならば、外側のさらなる動きは、また別の評価を生むはずである。私は今の時点にたって、あらためて趙樹理の人と文学について、その意味を考えなおしてみたいと思う。

この小論では、趙樹理の伝記的な側面と、その作品世界をとりあげたいが、まず、小論の「上」では、できるだけ多くの資料をつかって、趙樹理の年譜を作成したいと考えている。現在、私の得た資料だけでは、まだ欠落もかなりあるかも知れない。それらは今後も補正していかなければならないが、とにかくそれらを一応とりまとめて、今後の私の研究の基礎ともし、またこれから趙樹理研究をはじめられる方々の参考にも供したいと思う。

伝記に接近するためには、年譜だけでは、もちろん不十分なので、紙面の許されるかぎり、年譜を中心にして、伝記的に不明な点、記述に異動のみられる点、作品と伝記との接点などについて、時代を追っていくつかの項目を選び、説明を加えておきたい。

以上がこの小論の「上」の内容である。予定される「下」では、趙樹理の主な作品について、分析を加え、作品論として展開してみたいと考えている。

1. 趙樹理という作家

まず趙樹理という作家像を、具体的に与えてくれるジャック・ヴェルデン⁽¹⁾の次の描写から読み始めることにしよう。1947年、国共内戦のはじまった翌年、山西省と境を接する河北省の冶陶^{よとう}という町で、彼は趙樹理と会った。

「その日は明け方から雪が降りつづいていた。わたしは床が石で畳んであるわたしの部屋で、ひどく憂鬱な淋しい思いをしながら坐っていた。その時外から木綿の綿入れの長衣を着て頭布をかぶり、幽霊みたいな姿のかれ（筆者注：趙樹理）が入って来たのだった。旧弊な学校教師みたいなお辞儀をしながら、火鉢のまえに腰掛けたかれは、寒くてたまらぬという風に、両手をかざして温まろうとした。かれはたえずブルブルふるえながら、チラリとわたしの顔を見ては目を伏せ、卓上から西瓜の種を拾うと、齒の間から上手に吐き出し、しばらくわたしの顔をまじまじと見詰めて、それからドギマギした風にわらった。何となくかしがちな男なんだろう／＼わたしは思った。だが、わたしの火鉢に手を温めにやってきたこの目立つまいとしている男は——毛沢東と朱徳を除けば——共産地区では一番有名な男だったのである。」（ジャック・ヴェルデン「ある乞食作家」⁽²⁾）

ヴェルデンの、趙樹理の生涯に対する興味は、「農村の知識分子たちが、なぜ蒋介石から離れて、共産党の側に移って行きつつあるか」を、ジャーナリストの眼でとらえることにあった。

ヴェルデンと対照的な記述は、フェドレンコ⁽³⁾の「趙樹理の文学」⁽⁴⁾である。最初の出合いは、1950年ソビエト大使館で、中国の文化人を迎えて開かれたレセプションの席上においてであった。

四月も終わろうとする頃で、その夜の北京は、新緑の海に沈んでいた。

「話が進むにつれて、私は相手を前よりいっそう注意深く観察しようと努めた。彼の動作は落ち着きはらっていた。…中略…話の初めに私の注意をひいた彼のはにかみは、今もって変わらなかった。私は話している間じゆう、大げさな言葉を恥じるこんな人が、どうしてあの「李有才板話」のような作品をつくることができたのかと、考えていた。しかし…中略…「板話」の作者とは、正にこういう人物でなければならないと、確信するためには、趙樹理ともしばらく一緒にいれば十分だったからである。更にいえば、李有才に独特なものの多くは、趙樹理の性格の中にもあるものであった。それは特にどんなものであろうか？ 彼の物腰や風貌にとって、極めて自然なその節度である。実生活の経験豊かな農民のもつ、あの繊細にして正確な人間理解である。それに、もちろん、あのユーモアがある。このユーモアは絶えず趙樹理のいたずらっぽく細められた目の中にひかっている、たまにだが、しかし的確的にを外さず、とびだしてくるのであった。」

ソビエトの中国文学研究者フェドレンコの眼は、趙樹理の物腰や風貌を通して、さらにその内面の世界をとらえている。いずれもやや長い引用になったが、趙樹理という人物を具体的に知るのに都合のよい文章のように思われる。趙樹理の伝記的資料は、一般に解放以前の時期について記述されたものが多い。⁽⁵⁾ また資料によって記述に異同のみられる箇所があるが、そうした伝記上の問題点をふくめて、以下の項目にしたがって述べていきたい。

2. 趙樹理と「八音会」(1919—1924)

趙樹理の故郷、沁水県の尉遅村に馮とよぶ親子二代、ひとうねの土地をもたぬ貧農が住んでいた。その息子を福貴といい、趙は「福貴あにい」と呼んでいた。趙樹理の「小説『福貴』」には、部分的に彼の生活がとりこまれている。」福貴はよその土地で物乞いをするまでになり、ついに餓死した。

福貴の家の裏の「东头院」とよばれる家に呂という四人兄弟が住んでいた。趙は、上の二人を伯父さんと呼び、下の二人を叔父さんと呼んでいた。彼らは、みんな大工仕事の腕をもっていたが、この地方ではそれで生計をたてることはむつかしく、副業というほうがよいくらいであった。° といって他に数亩（市制では1 亩は約6.6 アール）のやせた土地があるきりであり、生活が苦しかったので、彼らのうち末の弟が、30歳を過ぎてから結婚しただけで、他の三人は結婚していなかった。彼らは「民間音楽が好きで八音会（民族楽器を用いたしろうと合奏団）の楽器が長い間彼らの家におかれていた。趙樹理が、どらや太鼓が好きになったのも、大半はやはり彼らの家で教えてもらったのであった。

东头院の東北に、大きなくみの木があった。その木の下に石の洞窟が二つあった。「李有才板話」の舞台である。趙樹理の「よく知り合った善良なこの人たちは、貧困と凶作による飢饉のために、散りちりになり、死んでしまったりして、大多数はあとつぎさえ残していない。」（趙樹

理「新食堂里忆故人」—『建国十年文学创作选』中国青年出版社 1959, p. 232)

少年趙樹理は、手品をみると、すぐにまねてやってみせ、説書（講談、広い意味では浪曲のようなものをもいう）を聞くと、また器用に演ずることができたので、呂おじさんたちの仲間入りをし、八音会の団員になった。意外にはにかみ屋でありながら、好奇心をもった少年の鋭い感受性は、この民間芸能の世界がもっている農民性を、飽くことなく吸収していったにちがいない。後年、趙樹理が、文芸の民間形式に示す理解には、故郷のこうした人たちの生活感情が裏うちされていたことを見のがすことはできないであろう。

3. 師範学校から流浪の生活へ (1925—1936)

「…わたしの父親は、わたしが大きくなったら、農業にはつかせまい、と考えたわけではなかった。はからずも、私が満14歳になったその年、わたしの父は、ある隣人に勧められて考えを変え、わたしを高級小学に入れた。」（＜“出路”雑談＞『三复集』p. 113）

耕作の外に、唐箕編みや占いの臨時収入で一家の生計を支えていた父親としては、大きな決断であった。『『小二黒結婚』に登場する二諸葛^{ニシュウカ}には、この父親の投影』（＜也算経験＞）がみられる。

高級小学を卒業すると、山西省長治にある給費制度の第四師範学校の初級中学に籍をおくことになった。1925年、趙樹理が19歳の年であった。沁水県の山村に育った趙は、この学校の図書館で、はじめて西欧の近代思潮にふれた。中国の新文学——魯迅の小説など——にも視野がひらかれていったのは、この頃であろう。万曼^(註5)は「このとき、彼はすでに新文学の愛好者になっていて、かって新詩と小説を書いたことがあった。」と述べているが、今日残ってはいない。

趙樹理が20歳から26歳のころには、逮捕、投獄、それから流浪の生活がつづいた。この一連の遭遇は、北伐(1926)から翌27年の国共合作の決裂（蔣介石による反共クーデター、清党事件ともよばれる）、山西軍閥、閻錫山の共産党弾圧を背景に発生した。この時期は、趙の生涯のうちで、異常な不安定と抑圧を感受した時期であったが、この深刻な体験が、つぎの段階への醗酵期ともなったと考えられる。伝記資料の上で、もっとも異同のはげしいのもこの時期である。以下にそれら資料の異同箇所を対比しながら、この時期の軌跡をあとづけておきたい。

万曼編著によれば「当時(1926)彼(趙樹理)は、大革命のたかまりとともに、ある程度革命思想をうけ入れて、山西の青年学生とともに、熱烈に軍閥打倒の闘争に参加した。まもなく大革命は失敗し、……閻錫山は…(中略)…そこで共産党員の逮捕にかかった。趙樹理はまず反動的な学校当局によって除籍され、それにともない、反動的な閻錫山の匪賊集団によって、共産党の“容疑者”として迫害を受け、翌年ついに捕えられた。」（前掲書 p. 99）

上記旁点の箇所は、ジャック・ヴェルデン説（前掲書 p. 109）では、「“進歩思想”をもつ20名の学生グループの指導的人物になった」。また、趙が「放校処分」をうけた理由は、「学習課目に科学を十分に取入れておらず、無意味な古典があまりに多すぎる」ことについての不満、校長

の科学教室設立にからむ公金横領などの理由によって、校長の排斥運動をやり、校長は更迭したが、「趙ら5名の学生たちは、共産主義だ、として放校された」という、かなり具体的かつ詳細になっている。そして、妻の弔いのために、帰郷した趙は、「葬式のすんだ翌日閻錫山の手下のものに逮捕された」ことになっている。

ジャック・ヴェルデン説とは、また別の視点で、万曼の記述をより具体的に述べているのが、フェドレンコ説（前掲書 p. 247）である。

「山西の省都大原は、中国内部に自分のファシスト的専制領国をつくりあげようと夢んでいた最も破廉恥な軍閥のひとり閻錫山の領地となった。師範学校の生徒たる趙樹理は、闘っている民衆の側に立った。彼は、共産党に指導された革命グループに仲間入りした。まもなく、この若い革命家自身も共産党員となった。趙樹理は、党から命ぜられた仕事を果たそうとして、地下活動に入った。敵どもは青年の隠れ家を襲い彼を投獄した。二年間の禁固刑を終えると、趙樹理は、前より一層揺ぎない信念と、闘争への意志に溢れて、牢獄を出た。彼は故郷の村へ帰り、村の子供たちに読み書きを教えていたが、その後、旅回りの劇団の俳優となった。彼は党から命ぜられた仕事に最善をつくすため、つぎつぎと職をかえていった。彼は気まぐれな運命の手でどこへ運ばれようとも、党員としての義務を忠実に果たした。……」

フェドレンコの記述には、趙の学生時代のレジスタンスの運動から流浪にいたる時期に、一貫して、すでにマルクス主義のえいきょうをみている点において、特徴的である。しかし、他の資料には、こうした記述はみあたらない。

王春は「出獄以後、相変らず東奔西走し、あるときには、ささやかながら文筆によって、生計をたてていた」（注5. p. 25）とのみ記している。しかし、王春が、この時期の趙樹理について、指摘している点は、「一方で文学関係の青年たちと交わり、また一方では農民大衆とも接触を保っていた」ということである。

趙樹理は、感覚的にどらや太鼓、語りものや地方演劇——農民大衆の生活感情——への共感をあたためながら、後に知り得た近代文学の知識によって、彼らの精神風土に対しては、批判的な眼を養いえたであろう。しかし、農村の文化的土壌を基盤にした民間芸能が、趙樹理の内面で、文学として形成されるまでには、単に批判的客観的観点にたち得たのみでは、なお十分ではなかった。山西の寒府から勉学のために、長治の町へ出て来たのであったが、思いもかけぬ逮捕、投獄、それから流浪、といった悲惨な体験が、逆に趙の人間性をゆたかに、たくましく鍛え上げたことはたしかである。それがどのような過程で進化したのかは、資料的に十分に跡付けられないが、ただ趙樹理自身が間接的に語っているものがないわけではない。それは、彼の長編「李家莊の変遷」であり、その第三章、第四章は1930年の太原が舞台になっている。主人公の鉄鎖は、さいわい大工の腕があったので、田舎から出かせぎにやってきたが、仕事にあぶれて、山西軍のある参謀長の従卒になった。人のよい鉄鎖は、泥沼のような生活の中で、さまざまな事件に遭遇し、奔弄されるが、そのうちに、ふと確かな希望を探りあてる。私たちは、この鉄鎖を通して、作者、

趙樹理の、この時代に対する認識を、なにほどかは知り得るのではないだろうか。

この頃に書かれた「盤龍峪」^{パシロンユイ}は、「当時趙樹理が提唱していた農民のために書くこと、通俗化すること」(王春注5, p. 25)の実践として、最初に具体化された作品とみなされているが、現在残っていないので見るができない。

4. 太行山にて (1937—1948)

趙樹理の作品が、解放区の広大な農村に普及していくのには、単行本として読まれることのほかに、各地方の演劇や民歌に改編されて、ひろまっていく場合が多い。また連環画(絵ものがたり)に改編されたものも多い。毛沢東の「在延安文艺座谈会上的讲话」(42, 5)は、趙樹理は山西にいて出席できなかったけれども、この頃の趙の主な仕事は、小型新聞『中国人』の編集をし、同時にその記事を書くことであった。彼は小説、諷刺笑話、活報劇(新しい情報をドラマ風に演出したもの)、快板(語りもの)など、およそ通俗化に適合したあらゆるジャンルのものを書きつづけた。当時、趙と同じ村に住んでいた楊俊(注5, p. 111)は彼のプロフィールをよく伝えている。

「彼は愉快的な男で、よくおもしろい話をしていたが、それ以上によく芝居のひと節を口ずさんでいた。とりわけ彼の故郷の「上党梆子」^{シヤンタンバンズ}(上党は長治の旧名、拍子木を打ちながら歌う地方劇)が得意であった。」

「彼は胡弓をひくのが好きであった」が、抗戦中は手に入らなかった。そこで、「彼は口で胡弓やどらをまねて」「二本の簞で本を打ち」ながら歌った。興にのってくると、手ぶり足ぶみよろしく踊り出して、部屋じゆうをわかせる、といったこともあった。「趙樹理の行くところには、かならず笑い声がおこった」という言葉は、その間の様子をよく語っている。しかしまた彼は、ジャック・ヴェルデンやフェドレンコがみたような「はにかみ」や「節度」をもった温厚な人柄でもあった。おそらく、古くから「牛皮燈籠」(外から見たところでは暗いが内部は明るいというたとえ)として知られている山西人気質を、彼もまたうけているせいなのだろうか。

彼が少年時代に親しんだ民間芸能の修練によって、語りものや歌謡など、口頭による創作は、文字による創作に比べて、彼が、その個性のままに、思う存分活躍し得る表現形式であったにちがいない。彼は、この民間の旧形式を利用して、民族解放闘争の道理を説いたのである。文学作品と、まともな道理を説くことは、いかにも二律背反ではあるが、この二者の統一をめざすことを、文芸思想乃至は政策のひとつにかかげたのが、「文芸講話」であったのであれば、趙樹理はすでに、その精神を、山西の太行地区で実践していたことになる。

「いまあの村で、『小二黒』を演っている、と耳にするや、一二十里(中国里、市制では500メートル)離れたところに住むお婆さん、娘さん、子供を抱いた若いおかみさんまで、みんな見に行きたがった。青年たちはいうまでもない。けれども兵士や民衆のなかには、『小二黒』は知っているが、作者の趙樹理は知らない、という人たちがいた。」(楊俊注5, p. 112)

この文章は、解放区の文芸風土の一面と趙樹理の「小二黒結婚」(43, 5)の全面的な成功を語

っている。

ところで、呉調公(注5, p. 9)によれば、「小二黒結婚」が発表される以前に、その原稿が彭徳懷(当時副総司令)の目にとまり、「これほど調査、研究をして、大衆の中に深くわけ入った作品は、まだたくさんには出ていない。」という評価をうけた。「その後、この小説が延安の『解放日報』に掲載され、つづいて単行本にもなって、解放区の広大な読者に歓迎されるようになった」と述べている。「二黒結婚」について「毛沢東文芸思想の創作上の実践におけるひとつの勝利である」(周揚「論趙樹理の創作」)と評価されたのは、この小説が延安の『解放日報』に掲載されてからである。しかし、「文芸講話」は、行なわれたその時点では『解放日報』に発表されず、「1943年10月19日魯迅没後六週年記念日にはじめて発表された」⁽⁶⁾のであるから、「小二黒結婚」が掲載されたのは、43年10月以降のことであろうと推定される。

1946年7月に始った国共内戦の時期にも、趙樹理は山西を離れなかった。『新大衆報』の編集をしていたのは、この頃ではないかと思われるが、冶陶^{やとう}(河北省)で会ったジャック・ヴェルデンは、「毛沢東と朱徳を除けば共産地区で一番有名な男」と書いている。しかし、趙樹理の作品は、もはや解放区だけにとどまらず、矛盾によっても「李家庄の变迁」は整風以後、文芸作品が到達した高度な水準の例証である」(「論趙樹理の小説」46. 11『茅盾評論集』第二集 p. 114)とまとめられようになっていた。

5. 中華人民共和国成立以後(1949—)

中華人民共和国成立以後、趙樹理は『新大衆報』とともに北京に移った。『新大衆報』は『工人報』と改名され、農村から、都市の需要に応えるために、その性格を変えることになった。その新聞の記者として止まった趙自身についていえば、それほどに熟知している農村のテーマは第二義的なものとなり、生産や労働など工業化の課題に、その最重点のテーマを譲らねばならないことを意味していた。この頃労働者の演劇コンクールで、いくつかの芝居をみたり、工場へ短期間入ってみたりしているのは趙自身の意識のなかで、それがすでに始まっていたことをしめしている。ところが、「文連」や「文協」の重責をになっていた彼が、三年後には、「決心到群众中去」(52)を書いて、「勝手のわからぬ工場」を出て、「農村のよく知った道へ帰って」しまったのである。北京での新しい体験と努力の結果、「創作上の根据地は、それほど容易に創造できるものではない」(「下乡杂忆」59, p. 1)という結論に到達した上での「下郷」であった。しかし、彼の都会からの脱出は、実はその前年(51)に、始まっていた。この年まだ雪の解けない頃から、太行山行きを計画しながら、農業集団化の問題をテーマにした長編小説「三里湾」の構想をねっていた。

ところで、このことは別に、少し以前に、趙樹理は、二度にわたって自己批判(<「金鎖」发表前后>50)、<対「金鎖」問題的再検討>50)をしていたのである。

a) 「金鎖」問題と趙樹理の自己批判

この問題の発端は、大衆文芸創作研究会に寄稿された小説、孟淑池「金鎖」の評価をめぐる、趙の意見は研究会側と対立したが、趙は彼の編集をしていた雑誌『説説唱唱』(50.2—55.3)に、他の編集委員には相談することなく、この作品を掲載(第3, 第4期)したことから問題がおこった。

この作品に対する研究会側の意見を要約すると、「農村的色彩が濃く、言語も生き生きしているが、重大な欠陥が存在する。作者は旁観者の立場で金鎖を描いているので金鎖の階級性がいまいであり、また人物の発展過程も、具体的に書かれていないので、主題が明確でなく、現実を指導する意義に欠けている。しかし、流れ者の無産階級ともいべき性格をもつ金鎖を主人公にすれば、作品処理は容易ではない。また、「阿Q正伝」を模倣したところがある。」(＜読了「金鎖」以後＞『文艺報』50.17期 p. 15) この意見は、作品が雑誌に掲載されたことから、研究会側でいく度か討論会を開いてまとめられた結論である。

趙樹理の最初の自己批判＜「金鎖」发表前后＞(『文艺報』50. 17期)は、このあとに書かれた。このなかで、趙はまず、彼がこの作品の発表を主張した理由を述べた。

「…作者は解放以前の農村をまことによく理解している。「阿Q正伝」の枠組みを用いているとはいえ、その内容には剽窃のきらいはなく、また一般に農村を書いているものにみられるところの、ただ概念的に書いているという欠点もない。発表すれば、革命勢力がまだ到達しない以前のありのままの農村が、具体的にどのような状況にあったかを、人たちに理解してもらえと考えたからであった。」

そうして、二点——1)原稿処理に民主的態度を欠いたこと、2)正確な観点は唯一つありうるだけなのに、作者の意見を尊重して作品の欠陥を大目にみ、結果としては作者に不誠実であったこと、の二点について、自己批判をした。そうしてさらに「作者の意見を尊重した」点について自己弁明をした。

「この作品についてみると、部分的には趣味から出発しており、そのために事物に対する選択と批判をそこなう結果になっている。もともとは芸術観点の誤りであったから(旁点筆者)私(趙樹理)はそのことを作者にむかって提起もせず、また文章の上でも訂正しなかった。」

ところが、はからずもこの弁明が、再度の自己批判＜対「金鎖」問題的再検討＞(『文艺報』50. 20期)を書かねばならぬ事態を招いたのである。ところで、この小説の主な内容は、「ある悪地主の家に、難民となって流浪していた男(金鎖)が、作男として住みつき、間もなく難民の女も一人、地主の家につれて来られた。しかし地主は、金鎖に賃金を払わぬばかりか、強姦を拒んだ女を殺そうとし、金鎖もともに殺されるところであったが、ようやく逃れて解放軍に入り、この事件が明るみに出た。」(＜対「金鎖」問題的再検討＞より要約)というものであった。

趙樹理は、この「再自己批判」の中で、まずこの作品に対する彼自身のもともとの認識をつぎ

のように述べた。

「もしこれを真正面から書けば、この題材に欠陥はない。（やや公式化してはいるが）残念なことに、作者はそれでは十分でないと考えて、故意に主人公（作男）を醜悪化し、色情以外のなにものでもない低俗な趣味を用いて、人の興味をひこうとした。そうして、ついにこの作品を、部分的に変質させてしまったのである。」

つづけて彼は、三項目にわたって自己批判をした。

一、「自己批判」に対する自己批判

……最初の自己批判で足りなかった点は、「事がらの選択について」の問題を、立場の問題とみなさず——金鎖の、作品中での嘲弄（一般農民に対する）について、単に「言葉」「口ぶり」の無選択によるもの、と考えていた。現在考えると、この点はまことに不正確であり、実際には、それは「立場」の問題であった。……

二、弁解についての自己批判

私の弁解の中で、自己批判をしなければならないところは大へん多いが、いまはまず重要な二つの点について述べたい。

1. 多くの人は、この小説を「労働人民に対する侮辱だ」と言ったが、私は弁解して「そうではない」と言った。しかし、みなさんが正しくて、私が間違っていた。作品中では悪地主と農民を並列して、同じようにあらさがしをし、皮肉をこめて罵っているのだから、これを労働人民への侮辱でないとはいえないだろう。……

2. 「農村を書いている人たちのなかには、……（原文まま）……農民をすべて理想化して描いている。だからこそ比較的現実的な作品をえらんで、参考に供したいと考えた。」これも間違っていた。私がこのような弁解をしようとした考えも、自分が農村をよく知っているといううぬぼれからであった。

三、弁解についての保留と保留の中の自己批判

私が心配していることは、農村工作にあたっている人たちが、破産して社会の底辺にある、こうした階層の人たちの問題に、どう対処するか、ということである。この階層の人たちは、土地改革を経た村村でさえなお偏見の目でみられている。たとえば冠婚葬祭のとき、村人は、彼らと同席して、箸をとることを恥づべきこととしている。……

趙樹理のこの問題提起は、「作品の処理が容易でない」として「流れ者的無産階級」を特別扱いにする研究会側の意見とは対照的である。また、「金鎖」の掲載を主張した根据にも、一貫して、趙樹理の現実的な態度があったことを、私たちは見出すことができる。最後に、（四）作者に対する認識を述べて、趙は、この再自己批判をしめくくった。

「私は、やはりこの作者は、農村を書くための特殊な条件——生活をよく知っていること、文章が通俗的で、よくこなれていること——を具えているので、適切な政治学習を修めさえすれば、かならず好い作品が書けるようになる、と信じている。」

趙樹理は、こうして批判を受け入れたけれども、しかし、(四)で述べられた結論をみると、趙樹理は、この作品の評価については、いささかも譲ってはいない。私たちは、この批判事件を通して、趙樹理文学における政治と文学の矛盾を、意外に明瞭に読みとることができるように思う。政治次元で、趙樹理は自己批判をしたが、その後の趙樹理文学では、現実的態度はなお執拗であり、そのことがまた趙樹理文学のすぐれた特徴ともなっているように、私には思えるのである。

b) 趙樹理と農村「知識分子」の問題

解放後、趙樹理が描いた人物からみた作品には大よそ次の三つの系列がみられる。

1) 農村の積極的な老農民像を描いたもの。2) 農村のおくれた面や利己的な農民をユーモアをまじえて、辛辣に批判的に描いたもの。3) 農村知識分子——農村で中学校を卒業した青年像を描いたもの。

さて、ここでは、農村のインテリを題材とした趙樹理の作品をとりあげておきたい。それは、彼の文学と伝記的な側面との接点をなす題材とも考えられるからである。私は、この3)の系列の小説と、趙樹理が彼の娘に与えた手紙〈願你決心做一个劳动者〉(57)とを対置して考えるとき、趙樹理の知識分子問題に対する態度が、肉親を通して、あざやかに浮かび上がってくるように思えるのである。

趙樹理は、高級中学を卒業して、就職に迷っている彼の娘に、手紙を書いて、故郷の人民公社で働くか、それとも、北京で理容師か販売員のような「服務業」(大衆への奉仕の性格をもつ仕事)についてはどうかとすすめた。ところが彼女にとっては、このような仕事は問題にならなかった。現在彼女は農村工作に従事しながら、ペンをとっているが、趙はまずなによりも労働者になりなさい、と書きおくっている。同じ知識分子であっても、農業や理容師の仕事に、抵抗なく入っていくことのできる一般労働者の子弟の場合を、幹部の子弟のそれと比較して、娘もふくめて幹部の子弟であり、知識分子でもある青年の、内面にかくれた認識と行動の矛盾を説きあかし、娘への愛情をこめて、地についた生き方をすすめている。私はこの手紙に熱い感動を覚えたが、父親の、娘にあてたこの私信が、公開されるようになったいきさつも、なにかよく理解できるような気がする。

「互作鑑定」(62)に描かれる^{リョウチン}劉正という青年は、蜂の巣箱づくりは嫌だが、養蜂の作業ならばやる。土鍋づくりの作業はごめんだが、動力用蒸気エンジンの操作ならば学習したい。なぜなら、自分は中学を卒業したインテリなのだから、と考える。彼は「青年は心に大きな理想を抱き、でっかい英雄的な大事業をやるべきではないか」という野心ばかりにとりつかれて、「心を落着けて、労働に参加しようとしなさい」農村のインテリである。彼は自分の作業に対する労働点数にも不満をもっており、やがて農作業の軽視、農作業から逃れるための假病の工作、といった破綻をみせていく。彼はそうした破綻をつくろうために、マルクス主義の知識をもって隠れ蓑にしている。

それは一面で、青年期の光明と理想を前途にみて進む理想主義者のようにみえるが、実は同級生や仲間ともうまくやっていくことができずに、県委員会に投書して、自分の配置換えを要求する、といった人物である。しかし、このような青年は、どこへ行っても結果は同じであろう。趙樹理の、娘に与えた手紙には、このような知識⇔労働、理想⇔現実の矛盾を、まじめに肉親の問題に則して考えた跡がうかがわれ、この点が感動を与え、そうした人間的体験が、この「互作鑑定」という作品にテーマ化されているのであろう。「卖烟叶」では、そのような農村知識分子の、反革命への墮落を描いている。この問題に対する認識について、趙樹理の判断がそう誤っていた、とは私には考えられない。しかし、もしこうしたことを、作品のテーマとしてとりあげること自体が、革命的でない、とする批判があるとすれば、それは別問題であろう。指摘できることは、趙樹理が、問題意識を自らにひきつけたところで考え思索し、それをテーマ化したという、作家としてはしごく当然な、しかし執拗な現実主義的態度である。

c) 趙樹理批判

「趙樹理の作品と人物は、深ぶかとした泥土の中から掘り出したように感じさせる。その色艶は時の流れを経てもなお、けっして衰えるものではない。」⁽⁷⁾

康濯は、当時一部の作品にみられた概念化した“英雄形象”と対比して、このように批評した。同年(62年8月2日—16日)中国作家協会が、大連で開いた、農村を題材とする短篇小説創作座談会においても、邵荃麟(当時、作家協会副主席)は、趙樹理の作品を賞讃し、「農村における闘争の長期性、苦難性を書いている」⁽⁸⁾「提唱すべき創作方向として推賞した。」⁽⁹⁾しかし、64年にいたって、邵荃麟の主張は批判され(中間人物論批判)、康濯の前記の文章も「大連創作会議における“写中間人物”と“現実主義深化”の主張を宣伝したものだ」⁽¹⁰⁾として斥けられた。趙樹理自身も「最近数年来、趙樹理の作品は、みなぎる革命的熱情をもって、革命的農民の精神を描き出せないでいる」⁽¹¹⁾として、中間人物論批判の軌道の中で、評価をうけることになった。そうして、趙樹理への批判は、周揚(当時、中国共産党宣伝部副部長)らを頂点とした文学体制の崩壊(66)とともに、さらにエスカレートすることになった。

赵晋新<彻底肃清“锻炼锻炼”的流毒>(『光明日报』67. 1. 8)

魏天祥<赵树理是反革命修正主义文艺路线的“标兵”>(同)その他

これら批判論文の論調は、趙樹理批判が、すでに政治の次元に移行していることを示している。

「(趙樹理は)その後、自殺したとも伝えられているが、今のところその真偽はわからない。」⁽¹²⁾といった自殺説も一部に聞かれたが、74年ごろの訪中団報告の伝えるところでは、趙樹理は「なお健在でペンをとっている。作品は公表されることはないのだけれども。」というような話を聞いた。今年70歳にもなろうとする老作家に、今後さらに新しい作品の発表を期待することは、おそらく不可能であろう。彼が有名作家として生きた1940年代から60年代にいたる中国の激動の時期に、趙樹理の作品は、正から負へ価値づけられることになったが、しかし彼の作品は、中国の

農民，農村，社会，風土，人情について，まことに執拗な現実主義的態度に貫かれていた。その態度は，趙樹理の独特の個性によって裏打ちされていたように思われる。私は今，この個性的な作家についてさらによく考えなおしてみたいと考えている。伝記を書くほどのスペースはないので，はじめに記したように，ここでは伝記的な異同の点や，注目をひく問題などを，私なりにとりあげて記した。ここで趙樹理の伝記のすべてをあつかったわけではないことを書きそえておきたい。

(1975, 9. 16)

注

- 1) アメリカのジャーナリストで，もとライフ，タイム誌の通信員をしていたことがある。
- 2) ジャック・ヴェルデン『中国は世界をゆるがす』安藤次郎，他共訳（上）筑摩書房，1953，p. 105，この書はヴェルデンが1946年末，中国を訪れてから，49年初め頃までに見聞したところにもとづく記述である。
- 3) ニコライ・トロフィモヴィチ・フェドレンコ，1949年から50年にかけては，中国にあって，ソビエト外務省極東局長の要職につき，58年には，シナ学の分野で，ソビエト・アカデミーの準会員となる。
- 4) フェドレンコ『新中国の芸術家たち』木村浩訳，朝日新聞社 1960，p. 248
- 5) 王春「趙樹理怎样成为作家的」（『作家谈创作经验』曲士培，他編，新北京出版社 1951）
楊俊「我所看到的趙樹理」（高級中学『語文課文』第一冊 1952）
于在春主編，吳調公編写『人民作家趙樹理』四联出版社 1954）
万曼編著「小二黑結婚」—趙樹理的生活和创作（『現代作品选講』湖北人民出版社1956）
方欲晓「趙樹理的生平」（『趙樹理的小说』北京出版社 1964）
- 6) 李何林著『关于中国現代文学』新文艺出版社 1956
- 7) 康濯<试论近年間的短篇小説>（『文学评论』1962，5期）
- 8), 9), 10), 11), 『文艺报』編集部<关于“写中間人物”的材料>（『文艺报』1964，8—9期 p. 19-20）
- 12) 駒田信二訳「趙樹理集」解説（『中国の革命と文学』7，平凡社 1972，p.421）

趙 樹 理 年 譜

西 暦	作 品	事 項
1906 ^{注1}		<p>山西省沁水県尉遲村の没落した中農の家に生まれた。生家はもと10畝（6段）ばかりの土地をもつ中農であったが、父の代に土地はほとんど抵当に入っていた。</p> <p>父は耕作のほかに、唐箕編み、外傷の手当、占いなどを副業とし、村の事情にも精通していた。</p>
1919 (13歳)		<p>趙は村の小学校に通うかたわら、牛飼い、炭運び、家畜の糞集めなどをして働き、貧しい生活のなかで育った。</p>
1920 (14歳)		<p>村の高級小学に進学。</p> <p>少年の頃に、すでに銅鑼、太鼓、笙、笛など民間楽器を達者にこなすことができ、説書（講談）、手品も見おぼえてできるほどの器用さがあった。それで大人たちは趙少年を八音会という素人合奏団のメンバーに入れた。</p>
1925 (19歳)		<p>長治に出て山西省立第四師範学校（給費）初級中学に入学^{注2}。この学生時代に、はじめて近代思潮にふれる。ツルゲーネフ、イプセン等を読み、中国の五四以来の新文学にも親しみ、新詩と小説の試作をはじめた。</p>
1928 (22歳)		<p>山西軍閥、閻錫山は革命的分子の弾圧をはじめ、趙は捕えられて、太原の監獄に送られた。</p>
1930 (24歳)		<p>2年間の禁固刑を終えて、出獄。</p> <p>その後は、旅廻りの劇団に入って役者になったり、太原では、新聞社に雑多な文章を書いて送り、などして生計をたてていた。それから職を求めて、開封へ行ったが、思わしくなくてまた太原にもどり、ここである軍人のボーイになったりなどして、流浪の生活がつづいた。</p>
1933 (27歳)	「盤龍峪」 ^{注3}	<p>太谷で小学校の教師となり、生活はやや安定した。</p>
1936 (30歳)	「打倒漢奸」 ^{注4} （『趙樹理選集』）	<p>このころ、山西省の東南部にいて、小型新聞を編集発行し、農民を対象に、小説、快板（語りもの）、寸劇などを書く。</p>
1937 (31歳)		<p>太行山脈南端、西寄りのこの地区は抗日根据地となり、犠牲救国同盟会に参加した。</p>
1938 (32歳)		<p>犠牲救国同盟会の区長となり（40日間）抗日自衛のための大衆動員や大衆組織の工作に従事する。</p>
1940 (34歳)		<p>春、家族を故郷においたまま、太行区南部から北上して、太行区の中心部に移り、山西省武郷県の小さな山村にある華北新華日報社（「新華日報」は中国共産党の機関誌）の校正係となる。沁水県は、その後、国民党と閻錫山軍閥に占拠された。</p>

西 暦	作 品	事 項
1942 (36歳)		『中国人』（日本軍占領地域向けの小型新聞）の編集を担当。外部からの寄稿がなかったので、くだけた論説や小説、話劇（新劇）、唱劇（旧劇）、活報劇（時事問題や消息をドラマ風に演出したもの）、諷刺笑話、快板（語りもの）など、さまざまな形式を手がけ、標題や挿し絵、図案までも書いた。
1943 (37歳)	「小二黒結婚」（『赵树理选集』） ^{注5} 「李有才板話」（同） 「两个世界」戏曲 ^{注6}	このころ、『中国人』につづいて、やがて、『新大衆』の編集を担当。 その後、解放区最大の出版社、新華書店の編集者のメンバーに加えられる。
1944 (38歳)	「龐如林」鼓詞 「孟祥英翻身」ルポルタージュ 「地板」（『赵树理选集』）	春、晋冀魯予辺区政府が広く農村に呼びかけて募集した作品を一カ月ばかり審査をする。 冬、太行区の「群英会」（労働英雄表彰大会）と「生産戦績展覽会」に出席して、「龐如林」「孟祥英翻身」の労働英雄伝を二編書く。
1945 (39歳)	「李家庄的变迁」（人民文学出版社、52）	沁水県の解放（春）にともない、1940年以来、家族を残したままにしていた故郷に、夏、帰る。
1946 (40歳)	「福貴」（『福貴』中原新華書店、49） 「催糧差」	
1947 (41歳)	「小經理」	山西省と境を接する河北省の冶陶で、ジャック・ヴェルデンと会う。
1948 (42歳)	「邪不压正」	8カ月間土地改革の仕事に参加。 冬、帰郷し、2カ月間滞在する。
1949 (43歳)	「传家宝」 ^{注7} （『赵树理选集』） 「田寡妇看瓜」 <也算經驗>（『三复集』） ^{注8} <艺术与农村> ^{注9} <「谈群众创作」> ^{注10}	北京に移る。『新大衆報』も北京に移され、『工人報』と改名。趙はその記者としてとどまる。 7月10日、中華全国文学芸術工作者代表大会で、「水准和宏願」 ^{注11} と題してあいさつし、彼自身の今後の創作方向について話した。 中華全国文学芸術界連合会の常任委員となる。 中華全国文学工作者協会の常任委員、兼創作部責任者となる（ ^{注12} ） 10月 丁玲らとソビエトを訪問、十月社会主義革命三十二周年記念式典に参列。
1950 (44歳)	「石不烂赶车」 ^{注13} 鼓詞 「万象楼」戏曲 「登記」 ^{注14} <关于「邪不压正」> <「金鎖」发表前后>（『文艺报』17期） <对「金鎖」問題的再检讨>（同、20期）	大衆文芸創作研究会の機関誌『説唱唱』（1950、2—55,3）の編集にあたる。 北京市文学芸術界連合会の組織工作にあたる。（文連の副主席兼創作部部长） 4月ソビエト大使館が中国の文化人を招いて催したレセプションの席で、フェドレンコに会う。

西 暦	作 品	事 項
1951 (45歳)	＜我与『説説唱唱』＞	春，雪解けを待って，山西省の太行山地区へ行き，2カ月滞在する。
1952 (46歳)	＜決心到群众中去＞	4月 『人民文学』編集部改組にともない，編集委員となる。 長治専区で農業合作社の創設，動員工作に参加。さらに二つの村で合作社創設の工作に協力した。
1953 (47歳)	「王家坡」小調(『説説唱唱』) ＜一张临别的照片＞(『三复集』)	8月 『人民文学』編集部改組にともない，編集委員を引く。 冬から「三里湾」を書きはじめる。
1954 (48歳)	「求雨」(『人民文学』10月) ＜谈六亿＞(『三复集』)	
1955 (49歳)	「三里湾」 「刘二和与王继圣」(初稿は50年頃) ＜「三里湾」写作前后＞(『三复集』) ＜谈课余和业余的文艺创作问题＞(同)	春，「三里湾」完成。
1956 (50歳)	「表明态度」(初稿は51年頃) ＜和青年作者谈创作＞(『三复集』) ＜供应群众更多更好的文艺作品＞(『人民日报』9.26)	9月 中国共産党第8回全国代表大会に出席。＜供应群众…＞はその大会での発言記録。
1957 (51歳)	＜要挖断可右之根＞(『三复集』) ＜“小戏”小谈＞(同) ＜“才”和“用”＞(同) ＜願你决心做一个劳动者＞(同) ＜“出路”杂谈＞(同) ＜不要这样多的幻想吧？＞(同) ＜青年与创作＞(同) ＜金字＞ ^{注15}	帰郷。沁水県尉遲村のダム建設の現場に通い，その工作にもときに参加する。
1958 (52歳)	「锻炼锻炼」(『下乡集』) 「灵泉洞」 ^{注17} ＜和工人习作者谈写作＞(『三复集』) ＜从曲艺中吸取养料＞(同) ＜万里同心＞(同) ＜我們要在思想上跃进＞(同) ＜彻底面向群众＞(同) ＜我爱相声《水兵破迷信》＞(同)	12月 『人民文学』編集部改組にともない，編集委員となる。 ^{注16} 「锻炼锻炼」は「57年の整風運動における農村生活の一面がまことによく反映されている」との好評をうけると同時に，「現実を歪曲した作品だ」とみる批判もうける。
1959 (53歳)	「老定额」(『下乡集』) ＜群众创作的真繁荣＞(『三复集』) ＜新食堂里忆故人＞(同)	4月「人民内部の矛盾を，文艺作品はどのように反映させるか」(『文艺报』59年7,9,10期)について「锻炼锻炼」がとりあげられ，討論される。

西 暦	作 品	事 項
	<p><下乡杂忆>(同)</p> <p><当前创作中的几个問題>(同)</p>	<p>山西省文連理論研究室主催の座談会に出席。<当前创作中…>はその時の発言記録。</p>
1960 (54歳)	<p>「戏为美国总统献策」讽刺詩(『人民文学』7月)</p> <p>「套不住的手」(『人民文学』11月)</p> <p><谈“久”>(『人民文学』8月)</p> <p><『三复集』后記></p>	<p>7月評論集『三复集』作家出版社出版。</p>
1961 (55歳)	<p>「実干家潘永福」(『下乡集』)</p>	
1962 (56歳)	<p>「杨老太爷」(『下乡集』)</p> <p>「张来兴」(同)</p> <p>「互作鉴定」(同)</p> <p><与读者谈「三里湾」>(『文艺报』10期)</p>	<p>8月2日—16日 中国作家協会が大連で開いた、農村を題材とする短編小説創作座談会において、趙樹理の作品がとりあげられ、「提唱すべき創作方向だ」と推賞される。</p>
1963 (57歳)	<p>「开渠」泽州秧歌(『人民文学』6月)</p> <p><随『下乡集』寄給农村读者></p>	<p>9月 作品集『下乡集』作家出版社出版。</p>
1964 (58歳)	<p>「卖烟叶」(『人民文学』1, 3月)</p>	<p>「中間人物描写論」(大連会議で提唱)批判にともなって趙樹理の作品も批判をうける。</p>
1966 (60歳)		<p>周揚らを頂点とする文学体制の崩壊にともない、趙樹理もまた批判、攻撃をあげる。</p>

注

- 1) 倉石武四郎氏が1954年中国を訪問されたとき、中国作家協会を通じて調査したもの。倉石武四郎「中国現代作家生年訂補表」(『世界文学辞典』研究社)による。
- 2) 第四師範学校入学については1923年説もある。1925年は方欲晓「赵树理的小说」北京出版社 1964 による
- 3) 農民と封建勢力との闘争の物語、もとの構想では長編、新聞社が発表を拒んだため擱筆未完。
- 4) 一幕劇、友人の発行していた小型新聞に掲載され、山西省の農村で上演されたことがある。
- 5) 新文学选集編集委員会『赵树理选集』开明书店 1951
- 6) 三幕劇、当時『晋冀魯豫辺区文艺小丛书』に収められたとのことであるが、未公開。
- 7) 「传家宝」には、吳茵等改編の話劇(新劇)、成容、邵慕水改編の越劇、王尊三改編鼓詞がある。
- 8) 『三复集』作家出版社出版 1960
- 9) 北京师范大学中文系編『中国現代文学史参考資料』第2卷所収、(影印)大安株式会社、1966
- 10) 趙樹理等著『大众文艺论集』工人出版社 1950 所収。
- 11) 趙は、今後は工農兵の喜ぶ通俗的な作品を多く書くことの決意をのべ、彼が過去に書いた作品はまだ彼の理想のものではなかった。彼が理想とするものは、一般大衆が語ったり、歌ったりできるもので、今後はこの方面に努力することを述べた。(吳調公編、注Ⅰ、5、p. 12)
- 12) 吳調公編 注Ⅰ、5、p. 13
- 13) 田間の長編叙事詩「赶车传」を改作した鼓詞、山西孟県の貧農石不烂の苦難な経歴と翻身の過去を述べたもの。
- 14) 端木蕻良改編の通俗新劇「罗汉钱」のほか、それぞれの地方劇に改編された脚本がある。

- 15) 『建国十年文学创作选』 散文，特写中国青年出版社 1959 所収。
- 16) 趙は57年以後65年まで編集委員であったことがはっきりしているが、それ以後は65年7月の改組で編集者（人民文学編集委員会）を残して編集委員の名はすべて削除されたので、不明。
- 17) 評書という講演形式が採用されているが、上巻が出版されたのみ。一部は『人民文学』1958年11月に掲載されている。